異端反駁（抜粋）

エイレナイオス
藤遥　制作

第一巻序　この書を書く理由

1:0:1 ある人々は真理を退けて、偽りの言葉と『はてしのない系図』を持ち込んでいます。使徒が言うとおり、それは『信仰による神の建て上げよりも、むしろ論議を引き起させる』ものです（第一テモテ一・四）。彼らは、巧みに練り上げたもっともらしさによって、経験の乏しい人々の思いを惑わし、とりこにしています。彼らは主の言葉を偽り、正しく語られたことを悪く解き明かす者となっています。また、多くの人を倒しています。知識を口実にして、この万物を据え、お整えになったかたから、その人々を引き離すのです。まるで、天と地とその中にあるすべてのものをお造りになったかたより、高く大いなるものを示せるかのようです。たしかに彼らは、言葉の技巧によって、単純な人々を巧みに探究へと誘い込みます。しかし、その人々をむごく滅ぼしてしまいます。造り主に対する冒瀆的で不敬な考えを、その人々に抱かせるからです。その人々は、偽りと真実とを見分けることができないのです。1:0:2 実際、誤りは、そのままの姿では現れません。裸にされて、見破られることのないようにするためです。そうではなく、人を引きつける覆いで巧みに身を飾ります。そして、言うのもばかげていますが、真理そのものよりも自分のほうが真実であるかのように見せるのです。外側の見せかけで、未熟な人々を欺くためです。わたしよりすぐれたある人が、このようなことについて言ったとおりです。『エメラルドという宝石は、ある人々のもとでは高い値がつく。ところが、技巧でそれに似せたガラスが、その宝石を辱める。巧みに仕組まれた細工を見分け、暴くことのできる人が、その場にいないかぎりは。実際、銅が銀に混ぜられたなら、未熟な者が、それをたやすく見分けられるだろうか』。ですから、わたしの落ち度のせいで、ある人々が、おおかみにさらわれる羊のように連れ去られることがあってはなりません。その人々は、彼らが外にまとう羊の衣のために、その正体に気づかないのです。主は、彼らを警戒するように、わたしたちに命じておられます（マタイ七・一五）。彼らは、わたしたちと似たことを語りながら、違うことを考えています。わたしは、自分たちでウァレンティノスの弟子だと言う人々の注解書を読みました。また、そのある者たちとは会って話し、その考えをつかみました。そこで、愛する友よ、この上なく奇怪で深遠な奥義を、あなたに明らかにすることが必要だと考えたのです。その奥義は、だれもが受け入れられるものではありません。だれもが脳みそを持っているわけではないからです。わたしがこれを明らかにするのは、あなたもそれを知って、あなたとともにいるすべての人々に明らかにするためです。そして、無分別の深みと、神に対する冒瀆[1]とから身を守るように、彼らに命じるためです。わたしは力の及ぶかぎり、今違うことを教えている人々の考えを、簡潔に、はっきりと示します。それは、プトレマイオスの一派の考えで、いわばウァレンティノスの学派の花です。また、わたしの乏しい力に応じて、その考えを覆す手がかりを、ほかの人々にも与えます。彼らの言うことが成り立たず、真理にも合わないことを示すのです。わたしは書くことに慣れてもいませんし、弁論の技を学んだこともありません。しかし、愛に促されて、あなたと、あなたとともにいるすべての人々に、彼らの教えを明らかにします。その教えは今まで隠されていましたが、今は神の恵みによって明るみに出たのです。『おおわれたもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知られてこないものはない』からです（マタイ一〇・二六）。1:0:3 ケルト人のもとに住み、たいていは異国の言葉に携わっているわたしに、あなたは弁論の技を求めはしないでしょう。わたしはそれを学んだことがありません。文筆家の力も求めないでしょう。わたしはそれを目指したことがありません。言葉の飾りも、人を説き伏せる力も求めないでしょう。わたしはそれを知らないのです。そうではなく、わたしは、飾らず、真実に、素朴な言葉で、愛をこめてあなたに書きました。それを、あなたは愛をもって受け取ってくれるでしょう。そして、わたしよりもふさわしいあなた自身が、わたしからいわば種と始まりを受け取って、それを自分のもとで育てるでしょう。また、わたしが少しの言葉で語ったことに、あなたは、その広い

思慮によって、多くの実を結ばせるでしょう。そして、わたしが力なく伝えたことを、あなたとともにいる人々に、力強く説き示すでしょう。あなたは以前から、彼らの考えを知りたいと求めていました。そのあなたのために、わたしは骨を折りました。その考えを明らかにするだけでなく、それが偽りであることを示す助けも差し出したのです。そのように、あなたも、主があなたに与えてくださった恵みに応じて、ほかの人々に力強く仕えるでしょう。人々が、もう彼らの説得に引き込まれないようにするためです。その説くところは、次のとおりです。

訳注

1 ギリシア語の引用では『キリストに対する』とある。

第一巻10章 1〜3節　信仰の基準と一つの教会

1:10:1 実際、教会は、全世界に、地の果てにまで蒔かれていて、使徒たちとその弟子たちから、次の信仰を受け取りました。それは、『天と地と海と、その中のすべてのものをお造りになった』唯一の神、全能の父を信じる信仰です（使徒一四・一五）。また、わたしたちの救いのために肉をおとりになった神の子、唯一のイエス・キリストを信じる信仰です。また、聖霊を信じる信仰です。聖霊は、預言者たちを通して、神のご計画をお告げになりました。また、わたしたちの主、愛するイエス・キリストについて、次のことをお告げになりました。その来臨[1]と、処女からの誕生と、受難と、死人の中からの復活と、肉のまま天にお昇りになることです。また、このかたが父の栄光のうちに天からおいでになることもお告げになりました。このかたがおいでになるのは、万物をまとめ直し、人類のすべての肉をよみがえらせてくださるためです（エペソ一・一〇）。また、見えない父の御心にしたがって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめるためです（ピリピ二・一〇）。ひざをかがめる相手は、わたしたちの主、神、救い主、王であるキリスト・イエスです。また、あらゆる舌がこのかたに告白するためです（ピリピ二・一一）。そして、このかたがすべての者を正しくおさばきになるためです。そのさばきで、このかたは、悪の霊と、背いて離反者となった天使たちを、永遠の火にお送りになります（エペソ六・一二）。不敬虔な人々、不義な人々、不法な人々、冒瀆する人々も、永遠の火にお送りになります。一方、正しく公正な人々には、いのちをお与えになって、賜物として朽ちないものを授け、永遠の栄光で包んでくださいます。その戒めを守り、その愛のうちにとどまり続けた人々です。ある人々は初めから、ある人々は悔い改めてから、とどまり続けたのです。1:10:2 教会は、先に述べたとおり、この宣教とこの信仰とを受け取りました。そして、全世界に散らばっていながら、まるで一つの家に住んでいるかのように、それを注意深く守っています。また、まるで一つの魂と一つの心を持っているかのように、それを同じように信じています。そして、まるで一つの口を持っているかのように、声をそろえて、これを宣べ伝え、教え、伝えています。実際、世界の言葉はさまざまですが、伝承の力は一つで、同じです。ゲルマニアに建てられた教会も、違うことを信じたり、違うことを伝えたりしてはいません。イベリア人のもとにある教会も、ケルト人のもとにある教会も、そうです。東方にある教会も、エジプトにある教会も、リビヤにある教会も、世界の中央に建てられた教会も、そうです。むしろ、神のお造りになったものである太陽は、全世界で一つで、同じです。それと同じように、光である真理の宣教も、どこででも輝き、真理を悟るに至ることを望むすべての人を照らします（第一テモテ二・四）。教会の上に立つ人々のうち、語ることに非常にすぐれた人も、これと違うことを言いはしません。だれも師にまさる者ではないからです。語ることの弱い人も、伝承を減らしはしません。実際、信仰は一つで、同じものです。ですから、それについて多くを語れる人も、それを増し加えはしません。少ししか語れない人も、それを減らしはしません。1:10:3 ある人々が、理解に応じて、ほかの人より多く、あるいは少なく知っていることがあります。しかし、それは、主題を変えることによって生じるのではありません。この万物の造り主、作り手、養い手であるかたのほかに、別の神を考え出すことによるのでもありません。まるで、このかたでは、わたしたちに足りないかのようにです。別のキリストや、別のひとり子を考え出すことによるのでもありません。そうではなく、次のようなことによって生じるのです。まず、たとえで語られたすべてのことを探って、真理の主題に結び合わせることです。また、人類に対してなされた神のお働きとご計画を、詳しく語ることです。背いた天使たちの離反においても、人々の不従順においても、神が寛容でおられたことを、説き明かすことです。同じひとりの神が、なぜ一時のものと永遠のもの、天のものと地のものをお造りになったのかを、告げることです。神は見えないかたであるのに、ご自分の預言者たちにお現れになりました。それも一つの姿ではな

く、人ごとに違うしかたでお現れになったのです。なぜそうなさったのかを理解することです。なぜ人類に多くの契約が与えられたのかを告げ、それぞれの契約の性格がどのようなものかを教えることです。神が、すべての者をあわれんでくださるために、すべてのものを不信仰のなかにお閉じ込めになったのはなぜかを、探ることです（ローマ一一・三二）。神の言が肉体となり、苦しみをお受けになったのはなぜかを思って、感謝することです（ヨハネ一・一四）。神の子の来臨が、なぜ終わりの時に、すなわち終わりに現れて、初めに現れなかったのか[2]を、告げることです。終わりのことと来たるべきことについて、聖書に記されているかぎりのことを、ひもとくことです。神は、望みのないものと見られていた異邦人を、共に相続する者、共に一つのからだとなる者となさいました。聖徒たちと共にあずかる者ともなさったのです（エペソ三・六）。なぜそうなさったのかを、黙っていないことです。この死ぬべき肉が、どのようにして死なないものを着、朽ちるものが朽ちないものを着るのかを、告げることです（第一コリント一五・五三～五四）。民でなかった者が、どのようにして民となり、愛されなかった者が、愛される者となったのかを、宣べ伝えることです（ホセア二・二三、ローマ九・二五）。また、夫のない者の子が、とついだ者の子よりも、どのようにして多くなるのかを、宣べ伝えることです（イザヤ五四・一、ガラテヤ四・二七）。実際、使徒は、このようなことや、これに似たことについて叫んだのです。『ああ深いかな、神の富と知恵と知識とは。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい』（ローマ一一・三三）。しかし、それは、迷い出たアイオーンのエンテュメーシスを考え出すことによるのではありません。創造者であり造り主であるかたの上にそれを置き、造り主と彼らとの母とすることによるのではないのです。そうして、これほどの冒瀆に行き着くことによるのでもありません。また、エンテュメーシスの上にさらにプレーローマを置くことによるのでもありません。そこに、ある時は三十、ある時は数えきれないほど多くのアイオーンがあると偽ることによるのでもないのです。まことに神の悟りを欠いた教師たちが、そう言っているのです。一方、全体としての教会は、先に述べたとおり、全世界で一つの同じ信仰を持っているのです。

訳注

1 ギリシア語の引用では複数形で、二度の来臨を指すとも読める。
2 ギリシア語の引用では『終わりに、初めであるかたが現れた』。

第三巻 序、1章、2章　使徒の福音と伝承

3:0:1 愛する友よ、あなたはわたしに命じていました。ウァレンティノスから出た考えを、明るみに出すようにということです。その考えは、彼ら自身の思うところでは、隠されたものです。また、彼らの説がまちまちであることを示し、彼らを反駁する論を加えるように、とも命じていました。そこでわたしは、彼らを論駁することに取りかかりました。すべての異端の者たちの父であるシモンから始めて、その教えと継承とを明らかにし、彼らすべてに反論するのです。彼らの暴露と反駁は、一つの著作ではあっても多くの巻にわたるので、わたしはあなたに何巻かの書を送りました。その第一巻は、彼らすべての考えを収め、彼らの習わしと、生き方の特徴とを示しています。第二巻では、彼らの誤った教えが反駁され、覆されました。また、その教えが裸にされ、ありのままの姿で示されました。この第三巻では、聖書から証明を持ち出します。それは、あなたが命じたことのうち、わたしの側に欠けるものが何もないためです。それだけでなく、あなたが思っていた以上の手がかりを、わたしから受け取るためです。どんなしかたであれ誤ったことを教える人々を、論駁し、覆す手がかりです。神のうちにある愛は豊かで、物惜しみをしないので、人が求めるよりも多くを与えるからです。ですから、前の二巻でわたしが述べたことを覚えていてください。そして、これをそれに加えるなら、すべての異端の者たちに対する、この上なく完全な反論を、わたしから得ることになります。また、ただ一つの、まことの、いのちを与える信仰のために、確信をもって、力を尽くして、彼らに立ち向かうことになります。この信仰は、教会が使徒たちから受け、自分の子らに分け与えたものです。実際、万物の主は、ご自分の使徒たちに福音の権能をお与えになりました。わたしたちは、この使徒たちを通して、真理を、すなわち神の子の教えを知ったのです。主はこの使徒たちに、こう仰せになりました。『あなたがたに聞き従う者は、わたしに聞き従うのであり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒み、わたしをおつかわしになったかたを拒むのである』（ルカ一〇・一六）。

3:1:1 実際、わたしたちが救いのご計画を知ったのは、ほかの人々を通してではありません。福音をわたしたちに届けた人々を通してです。彼らは、その福音を、そのときには宣べ伝えましたが、後には神の御心によって、聖書にしてわたしたちに伝えました。その福音は、わたしたちの信仰の基礎となり、柱となるはずのものでした。使徒たちが完全な知識を持つ前に宣べ伝えた、と言うことは許されないからです。ある人々は、自分たちは使徒たちを正す者だと誇って、あえてそう言っています。実際、わたしたちの主は死人の中からおよみがえりになり、使徒たちは、くだってこられた聖霊の力を、上から着せられました（ルカ二四・四九、使徒一・八）。その後で、使徒たちは、すべてのことについて満たされ、完全な知識を持ったのです。そして、地の果てにまで出て行き、神からわたしたちに来る良いものを告げ知らせ、天の平和を人々に宣べ伝えました。彼らは、みながそろって、またひとりひとりが、神の福音を持っていたのです。こうして、ペテロとパウロがローマで福音を宣べ伝え、教会の基礎を据えていたとき、マタイは福音を書き記したものを出しました。ヘブル人のあいだで、彼らの言葉で出したのです。この二人が去った後、ペテロの弟子で通訳であったマルコも、ペテロが宣べ伝えたことを書いて、わたしたちに伝えました。また、パウロに付き従ったルカも、パウロが宣べ伝えていた福音を、一巻の書に収めました。その後、主の弟子で、主の胸に寄りかかっていたヨハネも、アジヤのエペソに住んでいたとき、福音を書き記したものを出しました（ヨハネ一三・二五、二一・二〇）。3:1:2 この人々はみな、唯一の神と、神の子である唯一のキリストとを、わたしたちに伝えました。その神は、天と地の作り手であり、律法と預言者たちによって告げ知らされたかたです。彼らに同意しない者があれば、その人は、主の仲間たちを拒むのです。それだけでなく、主キリストご自身をも拒み、父をも拒みます。そして、自分で自分を罪に定め、自分の救いに逆らい、抵抗するのです。すべての異端の者たちが、そうしています。

3:2:1 実際、彼らは、聖書によって論駁されると、ひるがえって聖書そのものを責めます。聖書は正しくなく、権威もない、と言うのです。また、聖書はさまざまな言い方で語られていて、伝承を知らない者は、そこから真理を見いだすことができない、と言います。真理は文字によってではなく、生きた声によって伝えられたからだ、と言うのです。そのため、パウロもこう言った、と言います。『しかしわたしたちは、円熟している者の間では、知恵を語る。この知恵は、この世の者の知恵ではない』（第一コリント二・六）。そして、彼らはひとりひとり、自分で考え出したもの、つまり作り話こそが、この知恵だと言います。そうであれば、彼らに言わせると、真理は、まことにふさわしいところにあったことになります。ある時はウァレンティノスのうちに、ある時はマルキオンのうちに、ある時はケリントスのうちにありました。その後は、バシレイデスのうちにあったのです。あるいは、反対を唱える者ならだれのうちにも、あったことになります。救いに役立つことを何一つ語れなかった者なのにです。彼らはひとりひとり、まったくゆがんでいて、真理の基準を曲げ、恥じることもなく自分自身を宣べ伝えているからです。3:2:2 一方、わたしたちが、使徒たちから来た伝承を改めて持ち出して、彼らに迫ることがあります。長老たちの継承によって諸教会で守られている伝承です。すると、彼らは伝承に逆らいます。自分たちは長老たちよりも、それどころか使徒たちよりも賢いので、混じりけのない真理を見いだした、と言うのです。使徒たちは、救い主の言葉に律法的なものを混ぜたからだ、と言います。使徒たちだけではありません。主ご自身も、ある時は造物主から、ある時は中間から、またある時は高みからお語りになったのだ、と言います。そして、自分たちこそ、疑いなく、汚れなく、混じりけなく、隠された奥義を知っている、と言うのです。これはまさに、自分たちの作り手を、この上なく恥知らずに冒瀆することです。こうして、彼らは、もはや聖書にも伝承にも同意しないことになります。3:2:3 愛する友よ、わたしたちが戦っているのは、このような者たちです。彼らは、蛇のようにぬるぬるしていて、あらゆるところから逃げ出そうとします。ですから、あらゆるところで彼らに立ち向かわなければなりません。そうすれば、打ち返して恥じ入らせることで、そのうちのだれかを、真理への立ち返りに導くことができるかもしれません。実際、誤りにとらえられた魂が我に返るのは、たやすいことではありません。しかし、真理がそばに置かれるなら、誤りから逃れることは、まったく不可能ではないのです。

第三巻 3章 1〜3節　監督の継承とローマの教会

3:3:1 ですから、全世界に明らかにされた使徒たちの伝承を、真実を見たいと望む人はみな、どの教会でも見ることができます。また、使徒たちが諸教会に立てた監督たちと、わたしたちに至るまでのその後継者たちとを、数え上げることができます。この人々は、あの者たちがたわごとを言っているようなことを、何一つ教えもせず、知りもしませんでした。実際、使徒たちが隠された奥義を知っていて、それを、ほかの人々とは別に、ひそかに、円熟している者に教えていたとしましょう。それなら、使徒たちは、だれよりもまず、教会そのものまでゆだねた人々に、それを伝えたはずです。使徒たちは、自分の教える地位を譲る後継者が、何事においてもまったく円熟し、非難のない者であることを望んだからです。その人々が正しく務めを果たせば、大きな益が生まれます。しかし、つまずけば、この上ない災いが起こるのです。3:3:2 しかし、このような書物の中で、すべての教会の継承を数え上げるのは、あまりに長くなります。そこで、きわめて大きく、きわめて古く、だれにも知られている教会を取り上げます。この上なく誉れ高い二人の使徒、ペテロとパウロによって、ローマで基礎を据えられ、建てられた教会です。この教会が使徒たちから受けている伝承と、人々に宣べ伝えられた信仰とは、監督たちの継承を通して、わたしたちにまで届いています。それを示すことで、わたしは、あるべき筋道を外れて推論する者たちを、みな恥じ入らせます。ひとりよがりからであれ、虚栄からであれ、目が見えず、考えがゆがんでいるためであれ、どんなしかたでそうする者たちもです。実際、いっそう力ある卓越性のゆえに、すべての教会、すなわち各地の信者たちは、この教会と一致しなければなりません。そこでは、各地の人々によって、使徒たちから来た伝承が、いつも守られてきたのです。3:3:3 さて、祝福された使徒たちは、この教会の基礎を据え、建て上げて、教会を治める監督の務めをリノスにゆだねました。このリノスのことは、パウロがテモテにあてた手紙の中で触れています（第二テモテ四・二一）。リノスの後を継いだのはアネンクレトスです。その後、使徒たちから数えて三番目に、クレメンスが監督の務めを受けました。クレメンスは、使徒たち自身を見て語り合い、使徒たちの宣教がまだ耳に響き、伝承を目の前にしていた人です。ただし、それは彼ひとりではありませんでした。そのころには、使徒たちから教えを受けた人が、まだ大勢残っていたからです。さて、このクレメンスのときに、コリントにいる兄弟たちのあいだで、少なからぬ争いが起こりました。ローマにある教会は、きわめて行き届いた手紙をコリントの人々に送って、彼らを平和へと呼び集め、その信仰を新たにしました。また、使徒たちからつい先ごろ受けた伝承を告げ知らせました。その伝承は、唯一の全能の神を告げています。天と地の作り手であり、人を形造ってくださったかたです。洪水をお送りになり、アブラハムをお呼びになり、民をエジプトの地から導き出してくださり、モーセとお語りになったかたです。律法をお定めになり、預言者たちをおつかわしになり、悪魔とその使たちとのために火を用意なさったかたです（マタイ二五・四一）。望む人は、その手紙そのものから、諸教会がこのかたを、わたしたちの主イエス・キリストの父として告げ知らせていることを学べます。また、その手紙が、いま偽りを教えている者たちよりも古いので、教会の使徒的な伝承を悟ることもできます。その者たちは、造物主、すなわち今あるすべてのものの作り手の上に、別の神をでっち上げています。このクレメンスの後を継いだのはエウアレストスで、エウアレストスの後はアレクサンドロスです。それから、使徒たちから数えて六番目に、クシュストスが立てられました。その後がテレスフォロスで、彼はまた、この上なく栄光ある殉教を遂げました。それから、ヒュギノス、次にピオス、その後にアニケトスが続きました。アニケトスの後をソテルが継ぎ、今は、使徒たちから数えて十二番目に、エレウテロスが監督の務めにあります。この順序と継承によって、使徒たちから来た、教会の中の伝承と真理の宣教とが、わたしたちにまで届いています。これは、いのちを与える信仰が一つで、同じであることを示す、この上なく完全な証明です。その信仰

は、使徒たちから今に至るまで、教会の中で守られ、真理のうちに伝えられてきたのです。

第三巻 3 章 4 節〜4 章 3 節　ポリュカルポス、文字を持たない民の信仰

3:3:4 ポリュカルポスもまた、使徒たちから教えを受け、わたしたちの主を見た多くの人々と交わっただけではありません。使徒たちによって、アジヤのスミルナにある教会の監督に立てられもしました。わたしも、若いころに彼を見ています。彼は長く生きながらえ、たいへん年老いてから、この上なく栄光ある、気高い殉教を遂げて、この世を去ったからです。彼は、使徒たちから学んだことを、いつも教えていました。それは、彼が教会にも伝えたことで[1]、それだけが真実です。アジヤにあるすべての教会と、今に至るまでポリュカルポスの後を継いできた人々が、このことを証ししています。ポリュカルポスは、ウァレンティノスやマルキオン、また、ゆがんだ考えを持つほかの者たちよりも、はるかに重みがあります。真理の証人として、いっそう信頼できるのです。実際、この人は、アニケトスのときにローマに来て、先に述べた異端の者たちの多くを、神の教会に立ち返らせました。そのとき彼は、自分が使徒たちから受けたのは、ただ一つ、この真理だけだ、と告げ知らせました。それは、彼が教会にも伝えた真理です。また、彼がこう語るのを聞いた人々もいます。主の弟子ヨハネが、エペソで浴場に行き、中にケリントスがいるのを見ると、湯を浴びずに飛び出した、というのです。そのときヨハネは、真理の敵ケリントスが中にいるので、浴場が崩れ落ちはしないかと恐れる、と言ったそうです。また、ポリュカルポス自身も、あるとき出会ったマルキオンに「わたしたちが分かるか」と言われて、「分かる。おまえはサタンの長子だ」と答えました。使徒たちとその弟子たちは、それほどの恐れを抱いていて、真理を曲げた者たちのだれとも、言葉を交わすことさえしませんでした。パウロもこう言っているとおりです。『異端者は、一度、訓戒を加えた上で退けなさい。こういう人が、邪道に陥り、自分で自分を罪に定めていることを、知っているからである』（テトス三・一〇〜一一）。また、ポリュカルポスがピリピの人々にあてて書いた、きわめて行き届いた手紙もあります。望み、自分の救いを心にかける人は、その手紙から、彼の信仰の特徴と、真理の宣教とを学ぶことができます。さらに、エペソにある教会も、使徒たちの伝承の真実な証人です。この教会は、パウロによって基礎を据えられ、ヨハネがトラヤヌスの時代まで、人々のもとにとどまった教会です。

3:4:1 ですから、これほどの証明がある以上、真理を、もうほかの人々のもとで探し求めるべきではありません。真理は、教会から容易に受け取ることができます。使徒たちは、金持ちが倉に預けるように、真理に属するものをすべて、余すところなく教会に納めたからです。望む人がだれでも、教会から、いのちの飲み物を受けるためです。実際、教会こそ、いのちへの入口です。一方、ほかの者たちは、みな盗人であり、強盗です（ヨハネ一〇・八）。ですから、あの者たちを避けなければなりません。しかし、教会のものを、この上ない熱心さで愛し、真理の伝承をしっかりとつかまなければなりません。実際、どうでしょうか。たとえ何か小さな問題で論争が起こったとしても、使徒たちが暮らした、きわめて古い教会に立ち返るべきではないでしょうか。そして、その教会から、目の前の問題について、確かで、事実としてはっきりしていることを受け取るべきではないでしょうか。また、もし使徒たちが、わたしたちに聖書さえ残さなかったとしたら、どうでしょうか。教会をゆだねた人々に使徒たちが伝えた、伝承の秩序に従うべきだったのではないでしょうか。3:4:2 キリストを信じる異国の多くの民が、この秩序に同意しています。彼らは、紙と墨によらず、霊によって心に書かれた救いを持っています（第二コリント三・三）。また、古い伝承を注意深く守っています。彼らは、唯一の神を信じています。神の子キリスト・イエスによって、天と地と、その中のすべてのものをお造りになったかたです。キリストは、ご自分のお造りになったものへのこの上ない愛のゆえに、処女からの誕生をお受けになりました。みずから、ご自身によって人を神と結び合わせてくださいました。そして、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみをお受けになり、おとよみがえりになり、栄光のうちに天に上げられました（第一テモテ三・一六）。

そして、救われる人々の救い主として、さばかれる人々のさばき主として、栄光のうちにおいでになります。真理をゆがめる者たちと、ご自分の父と、ご自分の来臨とを侮る者たちを、永遠の火にお送りになります（マタイ二五・四一）。文字を持たずにこの信仰を信じた人々は、わたしたちの言葉から言えば、異国の者です。しかし、考えと習わしと生き方から言えば、信仰のゆえに、この上なく知恵ある人々です。あらゆる義と純潔と知恵のうちに歩んで、神に喜ばれているのです。だれかが彼らの言葉で語りかけ、異端の者たちが考え出したことを告げたとしましょう。彼らは、その冒瀆の話を聞くことさえ耐えられずに、すぐに耳をふさぎ、はるか遠くへ逃げ去るでしょう。このように、彼らは、使徒たちのあの古い伝承によって、あの者たちの奇怪な話を、何一つ心に思い浮かべることさえしません。彼らのところには、まだ、異端の集まりもなく、異端の教えも立てられていなかったからです。[3-4-3] 実際、ウァレンティノスより前に、ウァレンティノスから出た者たちはいませんでした。マルキオンより前に、マルキオンから出た者たちもいませんでした。先にわたしが数え上げた、悪い考えを持つほかの者たちも同じです。彼らのゆがんだ教えを始め、考え出した者たちが現れる前には、まったくいなかったのです。実際、ウァレンティノスは、ヒュギノスのときにローマに来て、ピオスのときに勢いを増し、アニケトスのときまでとどまりました。マルキオンより前のケルドンも、八番目の監督ヒュギノスのときに、たびたび教会に来て、罪の告白をしました。そして、最後までこのようにしていました。あるときはひそかに教え、あるときは罪の告白をし、あるときは、誤って教えていたことを何人かの人に暴かれたのです。そして、敬虔な人々の集まりから遠ざけられました[2]。ケルドンの後を継いだマルキオンは、十番目に監督の務めについていたアニケトスのときに、力を得ました。一方、グノーシス派と呼ばれるほかの者たちは、わたしが示したように、シモンの弟子メナンドロスから始まりを受けました。彼らはそれぞれ、自分が取り入れた考えの父として、またその長として現れました。これらの者はみな、ずっと後になって、教会の時代がすでに半ばに来てから、自分たちの離反へと立ち上がったのです[3]。

訳注

1 ギリシア語の引用では『教会も伝えていること』。
2 ギリシア語の引用では『自分から離れていった』。
3 この一文を欠く古い写本があり、後の書き込みとする説がある。

第三巻 11章 7〜9節　四つの福音書

3:11:7 以上が、福音の初めです。それらは、唯一の神を告げています。この万物の造り主であり、預言者たちによっても告げられ、モーセによって律法のご計画をお立てになったかたです。わたしたちの主イエス・キリストの父です。福音の初めは、このかたのほかに別の神を知らず、別の父も知りません。そのうえ、これらの福音書は、たいへん確かなものです。そのため、異端の者たち自身も福音書を証しし、彼らはそれぞれ、福音書から出発して、自分の教えを裏付けようとしています。実際、エビオン派は、マタイによる福音書だけを用いています。しかし、まさにその福音書によって論破され、主について正しくない思い込みをしていることが明らかになります。また、マルキオンは、ルカによる福音書を切り詰めています。しかし、彼の手もとにまだ残っている部分によって、ただひとりおられる神を冒瀆する者であることが示されます。また、イエスをキリストから切り離す者たちがいます。彼らは、キリストは苦しみを受けないままであったが、苦しみを受けたのはイエスだ、と言います。この者たちは、マルコによる福音書をほかの福音書より重んじています。しかし、真理への愛をもってそれを読むなら、正されることができます。一方、ウァレンティノスから出た者たちは、自分たちの対を証明するために、ヨハネによる福音書を余すところなく用いています。しかし、わたしが第一巻で示したとおり、まさにその福音書によって、何一つ正しいことを言っていないことが暴かれます。このように、反論する者たちが、わたしたちのために証しをし、これらの福音書を用いています。ですから、福音書についてのわたしの証明は、確かで真実です。3:11:8 福音書は、数において、これより多いことも、また少ないこともありえません。実際、わたしたちのいる世界には四つの方角があり、四つの主な風があります。そして、教会は全地に散らばっています。教会の柱であり支えであるのは、福音と、いのちの霊です。ですから、教会が四つの柱を持つのは当然です。その柱は、四方から朽ちないものを吹き送り、人々を生かします。このことから明らかなことがあります。言は万物の匠であり、ケルビムの上に座しておられ、すべてのものを保っておられます。この言が、人々にお現れになって、四つの形をした福音をわたしたちにお与えになったのです。この福音は、一つの霊によって保たれています。ダビデも、言の来臨を願って、こう言っているとおりです。『ケルビムの上に座せられる者よ、現れてください』（詩篇八〇・一）。ケルビムは四つの形をしていて、その形は、神の子のお働きを映し出しているからです。実際、『第一の生き物はししのよう』だ、と書かれています（黙示録四・七）。これは、御子の力ある働きと、主権ある者、王である者としての姿を表しています。第二の生き物は子牛のようで、いけにえをささげる祭司の位を表しています。第三の生き物は人のような顔をしていて、御子が人としておいでになったことを、はっきりと描いています。第四の生き物は飛ぶわしのようで、教会に飛んで来てくださる霊の恵みを表しています。ですから、福音書も、これらの生き物と調和していて、その上にキリスト・イエスが座しておられます。実際、一つの福音書は、父からの、御子の主権ある、力ある、栄光に満ちた誕生を語って、こう言います。『初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった』。また、『すべてのものは、これによってできた。これによらないでできたものは、一つもなかった』（ヨハネ一・一、三）。そのため、この福音書は、あらゆる確信に満ちています。この福音書の顔が、そのようなものだからです。一方、ルカによる福音書は、祭司の特徴を持っています。そのため、祭司ザカリヤが神にささげ物をしているところから始まります（ルカ一・八〜九）。実際、肥えた子牛が、もう用意されていました。弟が見つかったために、ほふられようとしていたのです（ルカ一五・二三）。一方、マタイは、人としての御子の誕生を語って、こう言います。『アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図』（マタイ一・一）。また、『キリストの誕生の次第はこうであった』（マタイ一・一八）。ですから、この福音書は人の形をしています。そのため、この福音書の全体を通して、御子は、へ

りくだった思いを持つ、柔和な人であり続けておられます。一方、マルコは、高い所から人々のところに来てくださる預言の霊から、書き始めました。『福音のはじめ。預言者イザヤの書に書いてあるように』（マルコ一・一～二）。こうしてマルコは、福音を、翼をもって飛ぶものとして映し出しています。そのため、短く、先を急ぐ告げ知らせ方をしました。これが、預言の特徴だからです。神の言ご自身も、モーセより前にいた族長たちには、神であるかたとして、栄光のうちに語りかけておられました。一方、律法のもとにいた人々には、祭司として仕える働きをしておられました。その後、わたしたちのために人となってくださいました。そして、天の霊の賜物を全地にお送りになり、ご自分の翼でわたしたちをおおってくださいました。ですから、神の子のお働きに応じて、生き物の形があり、生き物の形に応じて、福音の特徴があります。生き物は四つの形をしており、福音も四つの形、主のお働きも四つの形をしています。そのため、人類には四つの契約が与えられました[1]。一つ目は、洪水の前の、アダムのときの契約です。二つ目は、洪水の後の、ノアのときの契約です。三つ目は、モーセのときの律法の授与です。四つ目は、人を新しくし、万物を自分のうちにまとめ直す契約です。これは福音によるもので、人々を引き上げ、翼を与えて、天の御国へと運びます。3:11:9 事情はこのとおりです。ですから、福音の姿をむなしくする者たちは、みな愚かで、無知で、そのうえ厚かましいのです。彼らは、先に述べたものより多い福音の顔か、あるいは少ない顔を持ち込みます。ある者は、真理にあるよりも多くを見つけ出したと見られるために、ある者は、神のご計画を退けるために、そうしています。実際、マルキオンは、福音の全体を退けています。いや、まことに、自分自身を福音から切り離しているのです。それなのに、福音の一部を持っていると誇っています。また、ほかの者たちは、霊の賜物をむなしくしようとして、ヨハネによる福音書という姿を受け入れません。その賜物は、終わりの時に、父のみこころによって、人類に注がれたものです（使徒二・一七）。ヨハネによる福音書では、主が、助け主をお送りになると約束なさいました（ヨハネ一四・一六、二六、一五・二六、一六・七）。彼らは、この福音書を受け入れないどころか、福音と預言の霊とを、ともに退けているのです。まことに不幸な者たちです。彼らは、偽預言者であろうとしながら、預言の恵みを教会から退けています。彼らは、偽善のうちに来る者たちがいるからといって、兄弟たちとの交わりまで断つ人々と、同じようなありさまです。また、このような者たちは、使徒パウロさえ受け入れないことになります。パウロは、コリントの人々にあてた手紙の中で、預言の賜物について念入りに語っているからです。また、教会で預言する男たちと女たちのことも知っています（第一コリント一一・四～五）。ですから、彼らは、これらすべてのことによって神の霊に対して罪を犯し、ゆるされない罪に陥っています（マタイ一二・三一）。一方、ウァレンティノスから出た者たちは、今度もまた、まったく恐れを知りません。自分たちの書いたものを持ち出して、実際にある福音書よりも多くの福音書を持っている、と誇っているのです。実際、彼らはあまりに厚かましくなって、ついこのあいだ自分たちが書いたものに、『真理の福音』という題を付けています。それは、使徒たちの福音書と少しも一致しません。こうして、彼らのもとでは、福音さえ冒瀆なしにはありえないのです。実際、彼らの持ち出すものが真理の福音だとしましょう。ところが、それは、使徒たちからわたしたちに伝えられたものと似ていません。そうなると、使徒たちから伝えられたものは、もう真理の福音ではないことになります。望む人は、聖書そのものから示されるとおりに、このことを学ぶことができるわけです。しかし、あの福音書だけが真実で確かです。福音書は、先に述べたものより多くも、少なくもありえません。このことを、わたしは、これほど多くの、これほど大きな証拠によって示しました。実際、神はすべてを整った、ふさわしいものにお造りになりました。ですから、福音の姿も、よく整い、よく組み合わされていなければならなかったのです。こうして、わたしたちに福音を伝えた人々の考えを、彼らの書き始めそのものから調べました。次に、ほかの使徒たちのところに行き、神についての彼らの考えを探りましょう。そしてその後、主ご自身のお言葉を聞きましょう。

訳注

1 ギリシア語の引用では、四つの契約はノア、アブラハム、モーセ、福音。

第三巻 18章 1〜7節　まとめ直し

3:18:1 次のことが、はっきりと示されました。言は、初めに神と共におられたかたで、すべてのものは、この言によってできました（ヨハネ一・一〜三）。この言は、いつも人類のそばにおられました。その言が、終わりの時に、ご自分が形造られたものと一つになって、苦しみを受けうる人となられたのです。それは、父があらかじめ定めておかれた時に従ってのことでした。ある者たちは、「もしそのときに生まれたのなら、それより前にはキリストはいなかったことになる」と言います。この示されたことによって、その反論は、すべて退けられました。実際、わたしは、次のことを示しました。いつも父と共におられる神の子は、そのときに始まったのではありません。そうではなく、肉をおとりになり、人となられたときに、人間の長い連なりを、ご自分のうちにまとめ直されたのです。こうして、わたしたちに、救いをひとまとめにして与えてくださいました。それは、わたしたちがアダムにあって失ったものを、キリスト・イエスにあって取り戻すためでした。失ったものとは、神のかたちに、神にかたどった者であることです（創世記一・二六）。3:18:2 実際、ひとたび打ち負かされ、不従順によって打ち倒された人が、自分を形造り直して、勝利の賞を得ることはできませんでした（第一コリント九・二四）。また、罪のもとに倒れた者が救いを受けることも、できませんでした。そこで、御子が、その両方をなし遂げてくださったのです。御子は神の言であって、父のもとからお降りになり、肉をおとりになりました。そして死にまでお降りになって、わたしたちの救いのご計画を成し遂げてくださいました。パウロは、わたしたちに、この御子を疑わずに信じるようにと勧めて、また、こう言います。『あなたは心のうちで、だれが天に上ったのかと言うな。それは、キリストを引き降ろすことである。あるいは、だれが底知れぬ所に下ったのかと言うな。それは、キリストを死人の中から解き放つことである』（ローマ一〇・六〜七）。続けて、こう言います。『自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる』（ローマ一〇・九）。また、神の言がこれらのことをなさった理由を、こう述べています。『キリストは、生者と死者との主となるために、生き、死に、よみがえられたからである』（ローマ一四・九）。また、コリントの人々にあてて書いて、こう言います。『しかしわたしたちは、十字架につけられたキリスト・イエスを宣べ伝える』（第一コリント一・二三）。また、こう続けます。『わたしたちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあずかることではないか』（第一コリント一〇・一六）。3:18:3 では、わたしたちと共に食物にあずかってくださったのは、だれでしょうか。彼らがでっち上げる、上のキリストでしょうか。そのキリストは、ホロス、すなわち境界の上に身を伸ばして、彼らの母を形づくった、と彼らは言います。それとも、おとめから生まれたインマヌエルでしょうか。このかたは、凝乳と蜂蜜とを食べられました（イザヤ七・一四〜一五）。預言者は、このかたについて、こう言っています。『彼は人である。だれが彼を知るだろうか』（エレミヤ一七・九）。この同じかたを、パウロも宣べ伝えていました。パウロは言います。『わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったことである』（第一コリント一五・三〜四）。ですから、明らかです。パウロは、ほかのキリストを知りません。知っているのは、苦しみをお受けになり、葬られ、よみがえられたこのかただけです。このかたはお生まれになったかたでもあり、パウロは、このかたを人とも呼びました。実際、パウロは、まず『もしキリストが死人の中からよみがえったと宣べ伝えられているなら』と言いました（第一コリント一五・一二）。そして、キリストが肉をおとりになった理由を示して、こう続けました。『死が人によってきたのだから、死人の復活もまた、人によってくる』（第一コリント一五・二一）。また、パウロは、わたしたちの主の苦しみと、人であることと、死を語るところでは、どこでもキリストという名を

用いています。たとえば、次の箇所です。『あなたの食物によって、その人を滅ぼしてはならない。キリストは、その人のために死なれたのである』（ローマ一四・一五）。また、『あなたがたは、以前は遠く離れていたが、今ではキリストによって、キリストの血によって近いものとなったのである』（エペソ二・一三）。また、『キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、「木にかけられる者は、すべてのろわれる」と書いてある』（ガラテヤ三・一三）。また、『その弱い兄弟は、あなたの知識によって滅びることになる。キリストは、この兄弟のために死なれたのである』（第一コリント八・一一）。こうしてパウロは、次のことを示しています。苦しみを受けないキリストがイエスの上に降ったのではありません。そうではなく、イエス・キリストであるこのかたご自身が、わたしたちのために苦しみを受けられたのです。このかたは、横たわられ、よみがえられました。お降りになり、また昇られました。神の子であり、人の子となられたかたです。その名そのものも、このことを示しています。実際、キリスト、すなわち油注がれた者という名には、三つのものが含まれています。油をお注ぎになったかたと、油を受けられたかたご自身と、受けられた油そのものです。油をお注ぎになったのは父です。一方、油を受けられたのは御子で、霊において受けられました。この霊が油です。イザヤを通して、言がこう言っておられるとおりです。『神の霊がわたしに臨んだ。わたしに油を注がれたからである』（イザヤ六一・一）。こうして、言は、油をお注ぎになる父と、油を受けられた御子と、油である霊とを示しておられます。3:18:4 また、主ご自身も、苦しみを受けたのがだれであるかを、明らかにしておられます。実際、主は弟子たちに、こうお尋ねになりました。『人々は、わたし、人の子をだれと言っているか』（マタイ一六・一三）。そして、ペテロは『あなたこそ、生ける神の子キリストです』と答えました（マタイ一六・一六）。すると主はペテロをほめて、これをあらわしたのは血肉ではなく、天にいます父だ、と言われました（マタイ一六・一七）。こうして主は、この人の子が、生ける神の子キリストであることを、明らかになさいました。その証拠に、こう書かれています。『この時から、自分が必ずエルサレムに行き、祭司たちから多くの苦しみを受け、捨てられ、十字架につけられ、そして三日目によみがえるべきことを、弟子たちに示しはじめられた』（マタイ一六・二一）。ペテロにキリストと認められたのは、このかたです。このかたは、父が生ける神の子をペテロにあらわされたので、ペテロをさいわいな者と言われました。そのかたご自身が、ご自分は多くの苦しみを受け、十字架につけられなければならない、と言われたのです。そしてそのとき、ペテロをおしかりになりました。ペテロは、人の考えに従って、このかたをキリストと思い、このかたの苦しみを退けようとしていたからです（マタイ一六・二二～二三）。そして、弟子たちに言われました。『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うであろう』（マタイ一六・二四～二五）。実際、キリストは、これをはっきりと語っておられました。ご自身が、ご自分を告白したために死に渡され、自分のいのちを失う人々の救い主だったからです。3:18:5 彼らの言うように、キリストが苦しみを受けるはずがなく、イエスから飛び去ったとしましょう。それなら、なぜ弟子たちに、十字架を負って自分に従うように勧めたのでしょうか。彼らによれば、キリストは自分ではその十字架を負わず、苦しみを受けるご計画を捨てたことになるのです。実際、主がこう言われたのは、ある者たちがあえて説き明かすように、上の十字架についての知識のことではありません。そうではなく、主ご自身がお受けにならなければならなかった苦しみ、また弟子たち自身も受けることになる苦しみのことです。そのため、主は続けてこう言われました。『自分のいのちを救う者はそれを失い、それを失う者は、それを見いだすであろう』（マタイ一六・二五）。また、弟子たちが主のために苦しみを受けることになっていたので、主はユダヤ人たちに言われました。『見よ、わたしは、預言者、知者、教師たちをあなたがたにつかわす。あなたがたは、そのうちのある者を殺し、また十字架につけるであろう』（マタイ二三・三四）。また、弟子たちには、こう言われました。『あなたがたは、わたしのために長官たちや王たちの前に立つであろう。彼らは、あなたがたのうちのある者をむち打ち、殺し、町から町へと迫害して行くであろう』（マタイ一〇・一七～一八、二三・三四）。ですから、主は、迫害を受けることになる人々を知っておられました。ご自分のためにむち打たれ、殺されることになる

人々も知っておられたのです。したがって、主の言葉は、別の十字架についてではなく、苦しみについてでした。その苦しみは、まず主ご自身がお受けになり、その後に弟子たちが受けることになっていたのです。主は、弟子たちにも、こう勧められました。『からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄に投げ込む力のあるかたを恐れなさい』（マタイ一〇・二八）。また、ご自分を告白することを守るようにと勧められました。実際、主ご自身が、次のように約束しておられました。人々の前で主の名を告白する者を、主も父の前で告白してくださる。しかし、主を拒む者を、主もお拒みになり、主を告白することを恥じる者を、主もお恥じになる、と（マタイ一〇・三二～三三、マルコ八・三八）。事情はこのとおりなのに、ある者たちは、たいへん向こう見ずになって、殉教者たちさえ軽んじ、そしっています。殉教者たちは、主を告白したために殺され、主があらかじめ告げられたことをすべて耐え忍んでいます。そうして、苦しみを受けうるかたの殉教者となって、主の苦しみの足跡を踏み従おうとしているのです（第一ペテロ二・二一）。殉教者を軽んじるあの者たちのことは、わたしは、殉教者たち自身にゆだねます。殉教者たちの血が問われ、彼らが栄光を受けるとき、彼らの殉教を辱めた者はみな、キリストによって恥を見ることになるからです。また、主は十字架の上で、こう言われました。『父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです』（ルカ二三・三四）。このことからも、キリストの寛容と忍耐、あわれみといつくしみが示されています。キリストは、ご自身で苦しみをお受けになり、しかも、ご自分をひどく扱った者たちを、ご自身で弁護なさったのです。実際、神の言は、わたしたちにこう言われました。『敵を愛し、あなたがたを憎む者のために祈れ』（マタイ五・四四）。この言ご自身が、十字架の上で、そのとおりになさいました。それほどまでに人類を愛して、ご自分を殺す者たちのためにさえ、祈り求めてくださったのです。もしだれかが、二人がいるかのように考えて、両者を比べて判断するとしましょう。そうすれば、飛び去って、何の害も辱めも受けなかった者よりも、はるかにすぐれたかたが見いだされるでしょう。そのかたは、より忍耐深く、まことに善いかたです。このかたは、人々が加えた傷そのものと打ち傷と、そのほかの仕打ちのただ中でも、恵みを施してくださいます。そして、ご自分に加えられた悪を心にお留めになりません。3:18:6 同じことは、主が見せかけだけ苦しみを受けたと言う者たちにも、当てはまります。実際、彼らの言うキリストが、本当には苦しみを受けなかったとしましょう。そうなら、何の苦しみもなかったのですから、その者に感謝すべきことは何もありません。また、わたしたちが本当に苦しみを受けることになるとき、その者は、わたしたちを惑わす者に見えるでしょう。自分が先に真実に苦しみを受けていないのに、わたしたちには、打たれても、ほかの頬を向けるように勧めているからです（マタイ五・三九）。また、その者は、あの人々には、自分を、実際とは違うものに見せて惑わしたように、わたしたちをも惑わしていることになります。自分が耐え忍ばなかったことを、耐え忍ぶようにと勧めているからです。それだけではありません。わたしたちは、師にまさる者になってしまいます。師が受けもせず、耐えもしなかったことを、わたしたちが受け、耐え忍ぶのですから。しかし、まことの師は、わたしたちの主おひとりです。また、まことに善く、忍耐深いのは、神の子です。父なる神の言が、人の子となられたのです。実際、主は戦って、勝利を得られました。主は人として、父祖たちのために戦い、従順によって不従順を償われたからです。すなわち、主は強い人を縛りあげ、弱い者たちを解き放ってくださいました（マタイ一二・二九）。そして、罪を滅ぼして、ご自分が形造られたものに救いを与えてくださったのです。主は、このうえなく慈しみ深く、あわれみ深いかたで、人類を愛しておられるからです。3:18:7 こうして主は、先に述べたとおり、人を神に固く結びつけ、神と一つにしてくださいました。実際、もし人が人の敵に勝たなかったなら、敵が正しく打ち負かされたことにはならなかったでしょう。また逆に、もし神が救いを与えてくださらなかったなら、わたしたちは救いを確かに持つことはできなかったでしょう。また、もし人が神と結び合わされなかったなら、朽ちないことにあずかる者となることはできなかったでしょう。神と人との仲保者は、両者との親しいつながりによって、両者を友愛と和合に連れ戻さなければならなかったからです（第一テモテ二・五）。また、神が人を受け入れ、人が自分を神にゆだねるようにしなければなりませんでした[1]。実際、御子を通して、神から、神との交わりを受けなかったなら、どうして神の子とされることにあずかれたでしょうか。神の言が肉

となって、わたしたちと交わってくださらなかったなら、それはできなかったでしょう。そのため、主は、あらゆる年齢を通っておいでになり、すべての人に、神との交わりを回復してくださいました。ある者たちは、主は見せかけで現れただけだ、と言います。肉において生まれたのでも、本当に人となったのでもない、と言うのです。ですから、この者たちは、まだ古い罪の宣告のもとにいます。彼らは、罪に味方しているのです。彼らの言い分では、死はまだ打ち負かされていないことになるからです。その死は、アダムからモーセまで、アダムの違反と同じような罪を犯さなかった者をも、王として支配しました（ローマ五・一四）。一方、モーセを通して与えられた律法が来て、罪について、罪が罪深いものであることを証ししました。律法は、罪から王国を取り去り、罪が王ではなく盗人であることを暴いて、人殺しであることを示しました。しかし、罪を内に持っていた人には重荷を負わせ、その人が死に値する者であることを示しました。実際、律法は霊的なものだったので、罪を明らかにしただけで、罪を滅ぼしはしませんでした（ローマ七・一四）。罪が支配していたのは、霊ではなく、人だったからです。実際、罪を殺し、死に値する人をあがなうことになるかたは、その人と同じもの、すなわち人とならなければならなかったのです。その人は、罪によっては奴隷の身に引き込まれ、死によっては捕らえられていました。それは、人によって罪が殺され、人が死から出るためでした。実際、ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされ、いのちを失いました。この人は、耕されていない土から、はじめて形造られた人です。それと同じように、ひとりの人の従順によって、多くの人が義とされ、救いを受けなければなりませんでした（ローマ五・一九）。この人は、おとめから、はじめてお生まれになったかたです。このようにして、神の言は人となられました。モーセもこう言っているとおりです。『神、そのみわざはまことである』（申命記三二・四）。もし肉とならずに、肉であるかのように見えていただけなら、そのわざは、まことではなかったことになります。しかし、言は、見えていたとおりのものでもありました。神が、昔に形造られた人を、ご自分のうちにまとめ直されたのです。それは、罪を殺す一方で、死を滅ぼし、人を生かすためでした。ですから、神のみわざは、まことなのです。

訳注

1 ギリシア語の引用では『人を神に差し出し、人々に神を知らせる』。

第三巻 22章 3〜4節　エバとマリヤ

3:22:3 このために、ルカは、わたしたちの主のお生まれからアダムまでの系図を、七十二の世代として示しています（ルカ三・二三〜三八）。こうしてルカは、終わりを初めにつなぎ、次のことを示しているのです。アダムからこのかた、すべての民が散らされました。主ご自身が、その民と、あらゆる言葉と、人々の世代とを、アダム自身と共に、ご自分のうちにまとめ直されたのです。そのため、アダム自身も、パウロによって『きたるべき者の型』と呼ばれました（ローマ五・一四）。万物の造り主である言が、神の子をめぐって人類に起こるはずのご計画を、ご自分に向けて、あらかじめ形造っておられたからです。そのとき神は、最初の魂の人を、あらかじめ形造られました。それは、この人が、霊のかたによって救われるためでした。救うかたが先におられたので、救われるものも生じなければならなかったからです。救うかたが、むなしいかたとならないためです。3:22:4 これに応じて、おとめマリヤも、従順な者であることが分かります。マリヤは、『主よ、ご覧ください、あなたのはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように』と言いました（ルカ一・三八）。一方、エバは不従順でした。まだおとめであったときに、従わなかったからです。エバは、夫アダムを持ってはいましたが、まだおとめでした。実際、ふたりとも楽園で裸であったが、恥ずかしいとは思わなかったのです（創世記二・二五）。少し前に造られたばかりで、子を生むことを悟っていなかったからです。ふたりは、まず成長し、そのうえでふえていかなければならなかったからです。そのエバが不従順になって、自分にも全人類にも、死の原因となりました。同じように、マリヤも、あらかじめ定められた夫を持ちながら、それでもおとめでした。そのマリヤが従順で、自分にも全人類にも、救いの原因となったのです。そのため律法は、男と婚約していた女を、まだおとめであっても、婚約した男の妻と呼んでいます。こうして律法は、マリヤからエバへのさかのぼりを示しているのです。結ばれたものは、結びの結び目そのものが逆向きに戻されなければ、ほどけないからです。それは、最初の結び合わせが第二のものによってほどかれ、第二のものが、今度は最初のものを解き放つためです。こうして、最初の結び目は、第二の結びによってほどかれることになります。一方、第二の結びは、最初の結び目をほどく役を果たすのです。そのため主は、先の者はあとになり、あとの者は先になる、と言っておられました（マタイ一九・三〇、二〇・一六）。また、預言者も、同じことを示して、こう言っています。『父祖に代って、あなたに子らが生れた』（詩篇四五・一六）。実際、主は、死人の中から最初にお生まれになりました（コロサイ一・一八、黙示録一・五）。そして、昔の父祖たちをご自分のふところにお受け入れになって、神のいのちへと新たに生んでくださいました。アダムが死ぬ者たちの初めとなったので、主ご自身が、生きる者たちの初めとなられたのです。そのため、ルカも、系図の初めを主から始めて、アダムにまでさかのぼらせています。それによって、次のことを示しているのです。父祖たちが主を新たに生んだのではありません。主が父祖たちを、いのちの福音へと新たに生んでくださったのです。このようにして、エバの不従順の結び目も、マリヤの従順によってほどかれました。おとめエバが不信仰によって結んだものを、おとめマリヤが信仰によってほどいたからです。

第四巻 20章 1〜4節　言と知恵によって万物をお造りになった神

4:20:1 ですから、大きさの点では、神を知ることはできません。父を測ることはできないからです。しかし、愛の点では、わたしたちは、神に従いながら、いつも学んでいます。この愛こそが、神の言を通して、わたしたちを神へと導くものだからです。わたしたちは、神がこれほど大いなるかたであることを学びます。そして、ご自分によって万物をお立てになり、お選びになり、お整えになり、保っておられるのは、この神ご自身だということを学ぶのです。その万物の中には、わたしたちのいるこの世界も含まれます。ですから、わたしたちも、神に保たれているものと共に造られたのです。聖書は、この神について、こう言っています。『神は土のちりを取って人を形造り、いのちの息をその顔に吹きいれられた』（創世記二・七）。ですから、わたしたちを造ったのも、形造ったのも、天使たちではありません。天使たちには、神のかたちを造ることはできませんでした。主の言のほかのだれにも、万物の父から遠く離れた力にも、できなかったのです。神は、ご自分のもとであらかじめ定めておられたものを造るのに、これらの者を必要となさらなかったからです。神は、ご自分の手を持っておられないかのようなかたではありません。神のもとには、いつも言と知恵が、すなわち御子と霊がおられるからです。神は、この御子と霊によって、またそのうちで、万物を自由に、ご自分から進んでお造りになりました。そして、御子と霊に向かって、こう語っておられます。『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造ろう』（創世記一・二六）。そのとき神は、造られたものの実体も、作られたものの手本も、世界を飾るものの形も、ご自身で、ご自分のうちからお取りになったのです。4:20:2 ですから、次のように言う書は、よく言い表しています。『何よりもまず、神は一つであると信じなさい。神は万物を立て、整え、無いものから、万物が有るように造られた。神は万物を容れ、何ものにも容れられない』。また、預言者たちの中のマラキも、よく言っています。『われわれを造った神は一つではないか。われわれすべての父は一つではないか』（マラキ二・一〇）。これに応じて、使徒も言っています。『父なる神は一つである。すべての者の上にあり、わたしたちすべての者の内にいます』（エペソ四・六）。同じように、主も言っておられます。『すべての事は父からわたしに任せられています』（マタイ一一・二七）。明らかに、万物をお造りになったかたから任せられたのです。父は、他人のものではなく、ご自分のものを御子にお任せになったからです。すべてのものの中で、除かれたものは何もありません。そのため、この同じ御子が、ダビデのかぎを持つ、生者と死者との審判者なのです（使徒一〇・四二、黙示録三・七）。このかたが開けば閉じる者なく、閉じれば開く者はないでしょう（黙示録三・七）。天にも地にも地の下にも、父の巻物を開くことも、それを見ることも、ほかのだれにもできなかったからです（黙示録五・三）。ただ、ほふられて、ご自分の血によってわたしたちをあがなわれた小羊だけが、それをおできになったのです（黙示録五・六、九）。主は、言によって万物をお造りになり、知恵によってお整えになった、その同じかたから、すべてのものの権威をお受けになりました。言が肉体となったときのことです（ヨハネ一・一四）。それは、神の言が、天で首位を持っておられたように、地でも首位をお持ちになるためでした。主は義なる人であり、罪を犯さず、その口には偽りが見いだされなかったからです（第一ペテロ二・二二）。また、主ご自身が死人の中から最初に生れたかたとなられて、地の下にあるものの首位もお持ちになるためでした（コロサイ一・一八、黙示録一・五）。また、先に述べたように、万物が自分たちの王を見るためでした。さらに、父の光が、わたしたちの主の肉において現れ、主の肉から輝いてわたしたちに届くためでした。こうして人が、父の光に包まれて、朽ちないものに至るためでした。4:20:3 言、すなわち御子が、いつも父と共におられたことは、多くのことによって示しました。また、霊である知恵も、すべての創造の前から父のもとにおられました。そのことは、ソロモンを通して、こう言っておられます。『神は知恵をもって地の基をすえ、悟りをもって天を定められ

た。その知識によって淵はわきいで、雲は露をそそぐ』（箴言三・一九～二〇）。また、こうも言っておられます。『主は、そのわざのために、ご自分の道の初めとして、わたしを造られた。世々の前に、初めに、地を造られる前に、淵を設けられる前に、水の泉がわき出る前に、山々が定められる前に、わたしを据えられた。すべての丘より前に、わたしを生み出された』（箴言八・二二～二五）。さらに、こうも言っておられます。『彼が天を備えられたとき、わたしは彼と共にあった。彼が淵の泉を堅くし、地の基を強く据えられたとき、わたしは、そのかたわらにあって、整えていた。わたしは、彼が喜んでおられた者であった。日々に、常にその前で楽しんでいた。彼が、完成した世界を楽しみ、人の子らを喜ばれたときに』（箴言八・二七～三一）。4:20:4ですから、言と知恵によって万物をお造りになり、お整えになった神は、ただひとりです。このかたこそ造り主であり、この世界を人類にお与えになったかたです。このかたは、大きさの点では、ご自分がお造りになったすべての者に、知られていません。その高さを探り出した者は、すでに眠りについた昔の人々にも、今いる人々にも、だれもいないからです。しかし、愛の点では、いつも、あるかたを通して知られています。そのかたを通して、神は万物をお立てになったのです。このかたとは、神の言、わたしたちの主イエス・キリストです。主は、終わりの時に、人々の中で人となられました。終わりを初めに、すなわち人を神に、おつなぎになるためです。そのため、預言者たちは、同じ言から預言の賜物を受けて、肉による言の来臨を宣べ伝えました。この来臨によって、父のみこころのままに、神と人との交じり合いと交わりが生じたのです。それは、神の言が、初めからあらかじめ告げておられたとおりでした。人々は神を見、神は地上で人々と共に住まわれるであろう、と告げておられたのです。また、神がご自分の形造られたものと語り合ってくださり、そのそばにいてくださることも、告げておられました。神は、形造られたものをお救いになり、それが受け取ることのできるかたとなってくださるのです。そして、わたしたちを憎むすべての者の手から、わたしたちを救い出してくださいます（ルカ一・七一）。それは、背きのあらゆる霊からということです。また、わたしたちを、生きている限り、きよく正しく、ご自分に仕えさせてくださいます（ルカ一・七四～七五）。それは、人が神の霊を抱いて、父の栄光となるためです。

第四巻 20章 5〜7節　神の栄光は生きている人間

4:20:5 預言者たちは、これらのことを預言として示していました。しかし、ある人々が言うように、万物の父は見えないかたであり、預言者たちが見たのは別のかただ、というのではありません。そう言う人々は、預言とは何かを、まったく知らないのです。預言とは、来るべきことを告げること、すなわち、後に起こることを前もって示すことだからです。ですから、預言者たちは、人々が神を見るであろうことを、前もって示していたのです。主も、こう言っておられるとおりです。『心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう』（マタイ五・八）。しかし、神の大きさと驚くべき栄光の点では、神を見て、なお生きている人はないでしょう（出エジプト三三・二〇）。父は、何ものにも容れられないかただからです。一方、愛と人への慈愛の点では、また何でもおできになる点では、神は、ご自分を愛する者たちに、このことさえお許しになります。すなわち、神を見ることです。これこそ、預言者たちも預言していたことでした。『人にはできない事も、神にはできる』からです（ルカ一八・二七）。実際、人は、自分の力で神を見るのではありません。しかし、神は、お望みになって、人々にご自分を見せてくださいます。お望みになる人々に、お望みになるときに、お望みになるしかたで、見せてくださるのです。神は、すべてのことにおいて力あるかただからです。人々は、かつては預言の霊によって神を見ました。また、御子によって、子とされた者として神を見ました。そして、天の国では、父としての神を見るでしょう。すなわち、霊が、神の子において人を備えてくださいます。御子は、人を父のもとへ導いてくださいます。父は、永遠のいのちに至る朽ちないものを与えてくださいます。このいのちは、人がそれぞれ神を見ることによって、その人に生じるのです。実際、光を見る者たちは、光の中にいて、その輝きを受け取ります。そのように、神を見る者たちも、神の中にいて、神の輝きを受け取るのです。そして、その輝きが彼らを生かします。ですから、神を見る者たちは、いのちを受け取るのです。そのため、何ものにも容れられず、とらえられず、見えないかたが、人々に見えるかたとなってくださいます。人々がとらえ、容れることのできるかたとなってくださるのです。ご自分を受け取り、見る者たちを生かしてくださるためです。神の大きさが探りきれないように、神のいつくしみも言い表しきれないからです。このいつくしみによって、神はご自分を見せて、ご自分を見る者たちにいのちをお与えになるのです。いのちがなければ、生きることはできないからです。そして、いのちが成り立つのは、神にあずかることによります。神にあずかるとは、神を見ること[1]と、神のいつくしみを楽しむことです。4:20:6 ですから、人々は神を見るでしょう。見ることによって不死の者とされ、神にまで達して、生きるためです。このことは、先に述べたように、預言者たちを通して、象徴によって明らかにされていました。神の霊を担い、いつも神の来臨を待ち望む人々が、神を見るであろう、ということです。モーセも、申命記で、こう言っているとおりです。『その日に、われわれは、神が人と語られ、しかもなおその人が生きているのを見るであろう』（申命記五・二四）。実際、預言者たちのうち、ある者は預言の霊を見、その霊の働きが、あらゆる種類の賜物に注がれているのを見ました。ほかの者は、主の来臨と、初めからある主のお務めを見ました。主は、このお務めによって、天においても地においても行われる父のみこころをお果たしになったのです。またほかの者は、父の栄光の数々を見ました。それは時にかなったもので、そのとき見て聞いていた者たちにも、その後に聞くことになる人々にも、ふさわしいものでした。このようにして、神は現れておられたのです。これらすべてによって、父なる神が明らかになるからです。そこでは、霊が働いてくださり、御子が仕えてくださり、父がよしとしてくださり、人が救いへと完成されるのです。神も、預言者ホセアを通して、こう言っておられるとおりです。『わたしは幻を多く示した。預言者たちの手によって、わたしはなぞらえられた』（ホセア一二・一〇）。また、使徒は、まさにこのことを説き明かして、こう言っています。『霊の賜物は種々あるが、御

霊は同じである。務は種々あるが、主は同じである。働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである』（第一コリント一二・四～七）。しかし、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさるかたは、神です。そのため、神がどのようなかたで、どれほど大いなるかたであるかは、見ることも言い表すこともできません。神がお造りになった、すべてのものにとってです。しかし、決して知られていないわけではありません。すべてのものは、神の言を通して学ぶからです。父なる神はひとりであり、万物を保ち、すべてのものに存在をお与えになるかただ、ということをです。福音書に、こう書いてあるとおりです。『神を見た者は、父のふところにいるひとり子である御子のほかには、まだひとりもいない。このかたが、神をあらわしたのである』（ヨハネ一・一八）。4:20:7 ですから、父の御子は、初めから父をあらわしておられます。初めから父と共におられるかただからです。この御子が、預言の幻も、種々の賜物も、ご自分のお務めも、父の栄光をあらわすことも、人類にお示しになりました。順を追って、整然と、時にかなって、益となるようにお示しになったのです。実際、順を追うことがあるところには、揺るがないことがあります。揺るがないことがあるところには、時にかなうことがあります。時にかなうことがあるところには、益があります。そのため、言は、人々の益のために、父の恵みの管理者となられました。言は、人々のために、これほど多くのご計画をお立てになったのです。言は、人々には神をお示しになり、神には人を差し出してくださいます。また、父の見えないことを守っておられます。人がいつか神を侮る者とならないため、また、人が進んでいく目標をいつも持つためです。一方で、多くのご計画を通して、神を人々に見えるかたとしてお示しになります。人が神からまったく離れて、存在しなくなることがないためです。神の栄光とは生きている人間であり、人間のいのちとは神を見ることだからです。実際、造られたものを通して神が明らかになることが、地上に生きるすべてのものにいのちを与えます。そうであれば、言を通して父が現れることは、なおさら、神を見る者たちにいのちを与えるのです。

訳注

1 ギリシア語の引用では『神を知ること』とある。

第四巻 38章 1〜4節　人間の成長

4:38:1 もし、だれかが、こう言うとします。「それなら、どうなのか。神は、人を初めから完全にお造りになることが、おできにならなかったのか」。その人は、こう知るべきです。神は、いつも同じかたであり、造られたのでないかたですから、ご自身に関するかぎり、すべてのことがおできになります。しかし、神によって造られたものは、後から造られて始まりを持ちました。そのため、その分だけ、自分を造ってくださったかたより劣っていなければなりませんでした。新しく造られたものが、造られたのでないものであることはできなかったからです。そして、造られたのでないものではないので、そのために、完全なものに及ばないのです。後から生じたものであるので、その分だけ幼いからです。そして、幼いので、その分だけ、完全な訓練に慣れておらず、鍛えられていないのです。実際、母親は、幼子に完全な食物を与えることはできます。しかし、幼子は、自分には強すぎる食物を、まだ受け取ることができません。同じように、神ご自身は、初めから人に完全さを与えることがおできになりました。しかし、人は、それを受け取ることができませんでした。幼子だったからです。そのため、わたしたちの主は、終わりの時に、ご自分のうちに万物をまとめ直して、わたしたちのところに来てくださいました。ご自分がおできになるしかたではなく、わたしたちが主を見ることのできるしかたで、来てくださったのです。主ご自身は、言い表せないご自分の栄光のうちに、わたしたちのところに来ることがおできになったからです。しかし、わたしたちには、その栄光の大きさを担うことができませんでした。そのため、父の完全なパンであったかたが、幼子に対するように、ご自分を乳としてわたしたちに与えてくださいました。それが、主の人としての来臨でした。わたしたちが、主の肉の乳房から養われるようにして育ち、このような授乳によって、神の言を食べ、飲むことに慣れるためです。そうして、不死のパンであるかた、すなわち父の霊を、自分のうちに保つことができるようになるためです。4:38:2 そのため、パウロもコリントの人々に、こう言っています。『あなたがたに乳を飲ませて、堅い食物は与えなかった。食べる力が、まだあなたがたになかったからである』（第一コリント三・二）。すなわち、あなたがたは、主の来臨のうち、人としての来臨は学んだ。しかし、あなたがたが弱いので、父の霊は、まだあなたがたの上にとどまっておられない、ということです。実際、パウロは言います。『あなたがたの間に、ねたみや争いや分裂があるのは、あなたがたが肉の人であって、普通の人間のように歩いているためではないか』（第一コリント三・三）。これは、コリントの人々が不完全で、生き方が弱かったので、父の霊がまだ彼らのうちにおられなかった、ということです。使徒は、食物を与えることができました。使徒たちが手を置いた人々は、だれでも聖霊を受けたからです（使徒八・一七）。この聖霊は、いのちの食物です。しかし、コリントの人々は、それを受け取ることができませんでした。神に向かう生き方について、まだ弱く、鍛えられていない感覚しか持っていなかったからです。ですから、それと同じように、初めにも、神は人に完全さを与えることがおできになりました。しかし、人は、造られたばかりだったので、それを受け取ることができませんでした。受け取っても容れることができず、容れても保つことができなかったのです。そのため、神の言は、完全なかたであったのに、人とともに幼子となってくださいました。ご自分のためではありません。そうではなく、人が幼いので、人が容れることのできるかたとなってくださったのです。ですから、できないことや足りないことは、神の側にあったのではありません。造られたばかりの人の側にあったのです。人は、造られたのでない者ではなかったからです。4:38:3 一方、神については、力と知恵と善が、ともに明らかになります。力と善は、まだなかったものを、ご自分から進んでお立てになり、お造りになったことに明らかになります。知恵は、存在するものを、ふさわしく調和したものとしてお造りになったことに明らかになります。そして、あるものは、神の計り知れないいつくしみによって増し加わりを受け、長い時にわたって続きま

す。こうして、造られたのでないかたの栄光を得るのです。神が、善いものを惜しみなくお与えになるからです。実際、それらは、造られたという点では、造られたのでないものではありません。しかし、長い時代にわたって続くという点では、造られたのでないかたの力を身に受けるでしょう。神が、それらに、永遠に続くことを恵みとしてお与えになるからです。こうして、神は、すべてにおいて首位をお持ちになるでしょう。神だけが造られたのでないかたであり、すべてのものより先におられ、ご自身が、すべてのものの存在の原因でいらっしゃるからです。一方、ほかのすべてのものは、神に従うものとしてとどまります。神に従うことは、朽ちないものの中にとどまり続けることです。そして、朽ちないものは、造られたのでないかたの栄光です。ですから、人は、このような秩序、このような調和、このような導きによって立てられていきます。造られ、形造られた人が、造られたのでない神のかたちに、神にかたどった者となっていくのです。すなわち、父がよしとしてくださり、命じてくださいます。御子が仕えてくださり、形を与えてくださいます。霊が養ってくださり、育ててくださいます。そして、人が少しずつ進んで、完全に達するのです。完全に達するとは、造られたのでないかたに近い者となることです。完全なのは、造られたのでないかただからです。そして、そのかたは神です。しかし、人は、まず造られ、造られてから成長し、成長してから強くなり、強くなってから増えなければなりませんでした。そして、増えてから力を得、力を得てから栄光を受け、栄光を受けてから自分の主を見なければならなかったのです。人がやがて見ることになるのは、神だからです。そして、神を見ることは、朽ちないものをもたらします。朽ちないものは、人を神に近い者とするのです。4:38:4 ですから、成長の時を待たず、自分の性質の弱さを神のせいにする人々は、まったく道理をわきまえていません。彼らは、神も自分自身も知らず、飽くことを知らず、恩を知りません。まず、自分が造られたとおりのもの、すなわち苦しみを受けうる人間であろうとはしません。むしろ、人類の定めを踏み越えて、人となる前から、もう作り手である神に似た者であろうとします。そして、造られたのでない神と、いま造られたばかりの人との間に、何の違いもないことを望みます。彼らは、物言わぬ動物よりも道理をわきまえていません。動物たちは、神が自分たちを人にお造りにならないからといって、神を責めはしないからです。むしろ、それぞれが、造られたとおりのものとして、造られたことを感謝しています。実際、わたしたちは、神を責めています。神が、初めからわたしたちを神としてお造りにならず、まず人として、それからようやく神としてくださるからです。しかし、神は、ご自分の混じりけのない善によって、このことをなさったのです。だれも、神をねたむかた、惜しんで分け与えないかただと思わないためです。神は、こう言っておられます。『わたしは言った、あなたがたは神だ、あなたがたは皆いと高き者の子だ』（詩篇八二・六）。しかし、わたしたちは、神であることの力を担いきれません。そこで、神は言っておられます。『しかし、あなたがたは人のように死ぬであろう』（詩篇八二・七）。神は、こうして両方のことを語っておられます。一つは、ご自分の賜物のいつくしみ深さです。もう一つは、わたしたちの弱さと、わたしたちが自分のことを自分で決める者であることです。神は、ご自分のいつくしみによって、善いものを善いしかたでお与えになったからです。そして、人々を、ご自分に似た、自分のことを自分で決める者としてお造りになりました。また、先を見通すことによって、人の弱さと、そこから生じることをご存じでした。そして、愛と力によって、造られた性質の実体に打ち勝ってくださるでしょう。まず、性質が現れなければなりませんでした。その後で、死ぬべきものが死なないことに打ち負かされ、のまれなければなりませんでした（第二コリント五・四）。朽ちるものも、朽ちないことに打ち負かされ、のまれなければなりませんでした（第一コリント一五・五三）。そして、人は、善と悪の知識を受けて、神のかたちに、神にかたどった者とならなければならなかったのです。

第五巻 序、1章 1〜3節　人となられた言とあがない

5:0:1 愛する友よ、わたしは、この巻の前に四つの巻を書いて、あなたに送りました。その中で、すべての異端の者たちを暴き、彼らの教えを明らかにしました。また、不敬虔な考えを考え出した者たちを覆しました。一方では、彼らのひとりひとりが自分の書いたものに残した、それぞれの教えによって覆しました。もう一方では、あらゆる証明を重ねて進む道理によって覆しました。また、真理を示し、教会の宣教を明らかにしました。この宣教は、すでに示したとおり、預言者たちが宣べ伝えたものです。しかし、それを完成してくださったのはキリストであり、伝えたのは使徒たちです。教会は、使徒たちからそれを受け、全世界で、ただ教会だけがそれをよく守って、自分の子らに伝えました。さらに、異端の者たちがわたしに持ち出す問いを、すべて解きました。そして、使徒たちの教えを説き明かし、主がたとえによってお語りになり、またなさったことの多くを明らかにしました。この著作の全体は、偽って名づけられた知識の暴露と反駁です。その第五巻であるこの巻では、わたしたちの主の教えの残りと、使徒たちの手紙とから、証明を試みます。あなたがわたしに求めたとおりにするのです。わたしは、あなたの命じることに従っています（わたしも、みことばに仕える務めに就いているからです）。そして、自分の力に応じて、あらゆるしかたで努めています。あなたには、異端の者たちの反論に立ち向かう助けを、できるだけ多く差し出そうとしています。一方、迷っている者たちは、連れ戻して、神の教会に立ち返らせようとしています。また、信者になって間もない者たちの思いを、堅くしようとしています。それは、彼らが、教会からよく守られたまま受けた信仰を、揺るがずに保つためです。また、彼らに誤ったことを教え、真理から引き離そうとする者たちに、決してそらされないためです。あなたも、この書を読む人もみな、わたしが前に述べたことを、いっそう熱心に読まなければならないでしょう。それは、わたしが反論している主題そのものを、あなたが知るためです。そうすれば、あなたは、筋道に従って彼らに反論でき、彼らへの反論を、前もって備えたものから取り出すことができるからです。そのとき、あなたは、天からの信仰によって、彼らの考えをふん土のように捨て去ります（ピリピ三・八）。一方、ただひとりの、まことの確かな教師に従います。その教師とは、神の言、わたしたちの主イエス・キリストです。主は、計り知れない愛のゆえに、わたしたちと同じものとなってくださいました。わたしたちを、ご自身と同じものに完成してくださるためです。

5:1:1 実際、わたしたちが神のことを学ぶ道は、ほかにありませんでした。言であるわたしたちの教師が、人となってくださるほかはなかったのです。父のことをわたしたちにあらわすことができたのは、ほかのだれでもなく、父ご自身の言だけだったからです。実際、ほかのだれが、主の心を知っていたでしょうか。ほかのだれが、主の相談役となったでしょうか（ローマ一一・三四）。また、わたしたちのほうも、ほかのしかたでは学ぶことができませんでした。わたしたちの教師を見て、その声を自分の耳で聞き取るほかはなかったのです。それは、そのかたのわざにならう者となり、一方、そのかたの言葉を行う者となって、そのかたと交わりを持つためです。完全なかた、また、すべての造られたものより先におられるかたから、成長を受けて、そうするのです。わたしたちは、つい最近造られた者です。ただひとりの、最もすぐれた、善いかたによって、そのかたの似姿に造られました。朽ちないことを賜物として持っておられるかたです。まだいなかったわたしたちが存在するようにと、父があらかじめ知っておられたとおりに、あらかじめ定められていました。一方、造られたものの初めとして造られました。そのわたしたちが、神があらかじめ知っておられた時に、すべてにおいて完全な言のお務めによって、それを受けたのです。力ある言であり、まことの人であるかたが、とりこにされた者たちのために、ご自身をあがないとしてささげてくださったからです（第一テモテ二・六）。そのかたは、ご自分の血によって、道理にかなったしかたで、わたしたちをあがなってくださいました。離反

は、不当にわたしたちを支配していました。わたしたちは、本性からいえば全能の神のものでした。それなのに、離反は、本性に反してわたしたちを引き離し、自分の弟子にしてしまったのです。そのため、神の言は、その離反そのものに対してさえ、正しく立ち向かってくださいました。すべてにおいて力があり、ご自分の義に欠けるところのない言です。そして、ご自分のものを、離反からあがない取ってくださったのです。それは、力ずくによるのではありませんでした。離反は、初めに、自分のものでないものを飽くことなく奪い取って、わたしたちを支配しましたが、そのようにではありません。そうではなく、説き伏せることによってでした。望むものを、力を加えずに説き伏せてお受けになるのが、神にふさわしいしかただったのです。それは、正しいことが損なわれず、神が昔形造ってくださったものも滅びないためでした。こうして、主は、ご自分の血によってわたしたちをあがなってくださいました。わたしたちの魂のためにご自分の魂を、わたしたちの肉のためにご自分の肉を、与えてくださいました。また、神と人とが一つに結ばれて交わるために、父の霊を注いでくださいました。霊によって、神を人々のもとに降ろしてくださいました。一方、ご自分が肉をおとりになったことによって、人を再び神のもとに上げてくださいました。そして、来臨によって、神との交わりを通して、わたしたちに、確かに、まことに、朽ちないものを与えてくださいました。そのため、異端の者たちの教えは、すべて滅びたのです。5:1:2 実際、主は見せかけで現れたのだ、と言う者たちは、むなしい者です。これらのことは見せかけで起こったのではなく、真理の実体をもって起こったからです。もし、人でないのに人として現れたのなら、まことにそうであったもの、すなわち神の霊のままでいたのでもないことになります。霊は目に見えないからです。また、そのうちには、何の真実もなかったことになります。見えていたものではなかったからです。前にも述べたように、アブラハムやほかの預言者たちは、預言として主を見ていました。やがて起こることを、幻によって預言していたのです。ですから、もし今も、見えていたとおりのものでないのに、そのような姿で現れたのなら、人々は預言の幻を見たにすぎません。そして、別の来臨を待たなければならないことになります。その来臨のときに、今、人々が預言として見たとおりの者になるのです。また、わたしが示したように、見せかけで見えたにすぎないと言うことは、マリヤから何も受けなかったと言うことと同じです。主が、昔形造られたアダムをご自分のうちにまとめ直してくださらなければ、まことの血と肉をお持ちでないことになるからです。主は、その肉によって、わたしたちをあがなってくださいました。ですから、ウァレンティノスから出た者たちは、むなしい者です。彼らがこのことを教えるのは、肉の救いを締め出し、神が形造ってくださったものを退けるためなのです。5:1:3 エビオン派も、むなしい者です。彼らは、神と人とが一つになったことを、信仰によって自分の魂に受け入れず、むしろ、生まれの古いパン種にとどまっています（第一コリント五・七）。また、聖霊がマリヤに臨み、いと高き者の力がマリヤをおおったことを、悟ろうともしません。それゆえに、生まれ出たものが聖なるものであり、万物の父である、いと高き神の子であることも、悟ろうとしないのです（ルカ一・三五）。この父が、御子が肉をおとりになることを成し遂げてくださり、新しい生まれを示してくださったのです。それは、わたしたちが、前の生まれによって死を受け継いだように、この生まれによっていのちを受け継ぐためです。ですから、この者たちは、天のぶどう酒が混ぜ合わされることを退け、この世の水だけであればよいとします。神を受け入れて、自分と混ぜ合わせようとしないのです。むしろ、打ち負かされて楽園から追い出された者、すなわちアダムのうちに、とどまっています。彼らは、次のことに目を留めません。初めに、わたしたちはアダムにおいて形造られました。そのとき、神から出たいのちの息が、形造られたものと一つになって人を生かし、理性ある生き物として示しました（創世記二・七）。それと同じように、終わりには、父の言と神の霊が、昔形造られたアダムの実体と一つに結ばれてくださいました。そして、人を、生きた、完全な者としてくださったのです。完全な父を容れることのできる者としてくださったのです。それは、魂の人においてわたしたちがみな死んだように、霊のかたにおいて、みな生かされるためです（第一コリント一五・二二）。アダムは、一度も神の手を逃れたことはなかったからです。父は、その手に向かって、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造ろう』と言っておられます（創世記一・二六）。そのため、終わりに、父の手が、人を生きた者として完成してくださいました。それは、肉の欲によらず、人の欲にもよらず、父のみこころによる

ことでした（ヨハネ一・一三）。アダムが、神のかたちに、神にかたどった者となるためです。

第五巻 2章 2〜3節、16章 2〜3節、19章 1節　聖餐と復活、かたちと似姿、エバとマリヤ

5:2:2 神のご計画の全体を軽んじる者たちは、まったくむなしい者です。彼らは、肉の救いを否み、肉が新たに生まれることを退けて、肉は朽ちないことを容れることができない、と言います。しかし、もし肉が救われないのなら、主がご自分の血によってわたしたちをあがなってくださったのでもないことは、明らかです。また、聖餐の杯は主の血にあずかることではなく、わたしたちがさくパンも主のからだにあずかることではない、ということになります（第一コリント一〇・一六）。血は、血管と肉と、そのほか人に属する実体からでなければ、出てこないからです。神の言は、まことにその実体となってくださいました。そして、ご自分の血によって、わたしたちをあがなってくださったのです。主の使徒も、こう言っているとおりです。『わたしたちは、この御子によって、その血によるあがない、すなわち、罪のゆるしを受けている』（コロサイ一・一四）。わたしたちは主の肢体であり、造られたものによって養われています。その造られたものを、わたしたちに与えてくださるのは、主ご自身です。主は、思いのままに、ご自分の太陽をのぼらせてくださり、雨を降らしてくださいます（マタイ五・四五）。それで、主は、造られたものであるあの杯を、ご自分の流された血であると明言なさいました。その杯によって、わたしたちの血を増し加えてくださるのです。また、造られたものから出たあのパンを、ご自分のからだであると明言なさいました。そのパンによって、わたしたちのからだを増し加えてくださるのです。5:2:3 ですから、混ぜ合わされた杯と、作られたパンとは、神のことばを受けて、キリストの血とからだの聖餐となります。そして、それらによって、わたしたちの肉の実体は増し加わり、成り立っているのです。肉は、キリストの血とからだによって養われ、キリストの肢体となっています。それなのに、どうして彼らは、肉は神の賜物を容れることができない、と言うのでしょうか。その賜物とは、永遠のいのちです。幸いな使徒も、エペソ人への手紙で、こう言っているとおりです。『わたしたちは、キリストのからだの肢体であり、その肉とその骨から出たものである』（エペソ五・三〇）。使徒がこう言うのは、何か霊的な、目に見えない人についてではありません。霊には肉や骨はないからです（ルカ二四・三九）。そうではなく、まことの人のつくりについて言っているのです。それは、肉と筋と骨とから成るつくりです。このつくりが、キリストの血である杯によって養われ、キリストのからだであるパンによって増し加わるのです。また、地に伏せられたぶどうの木は、その時が来ると実を結びます。麦の粒は、地に落ちて解かれると、万物を保っておられる神の霊によって、何倍にもなって起き上がります。それらは、やがて知恵によって、人の用いるものとなり、神のことばを受けて聖餐となります。それは、キリストのからだと血です。それと同じように、わたしたちのからだも、聖餐によって養われ、地に置かれ、その中で解かれても、その時が来るとよみがえります。神の言が、からだに復活を与えてくださるのです。それは、父なる神の栄光のためです。父は、この死ぬものに死なないものをまとわせてくださり、朽ちるものに朽ちないものを惜しみなく与えてくださいます（第一コリント一五・五三）。神の力は、弱いところに完全にあらわれるからです（第二コリント一二・九）。それは、わたしたちが、自分自身からいのちを持っているかのように高ぶらないためです。恩を知らない思いを抱いて、いつか神に逆らって思い上がることのないためです。むしろ、わたしたちが、経験によって次のことを学ぶためです。すなわち、永遠に続いていられるのは、神の偉大さによるのであって、自分の本性によるのではない、ということです。そうして、神のもとにある栄光を、そのあるがままに、いつか失うことのないためです。また、自分の本性を知らずにいることのないためです。そうではなく、神に何がおできになり、人がどんな恵みを受けるのかを、知るためです。また、存在するもの、すなわち神と人とを、そのあるとおりに、まことにとらえることから、いつか迷い出ることのないためです。それに、前にも述べたように、神がわたしたちの身に解かれることが起こるのをお許しになったのも、

このためではないでしょうか。すなわち、わたしたちが、すべてを通して教えられるためです。そうして、すべてにおいて注意深く、神をも自分自身をも知らずにいることのない者となるためです。

5:16:2 この言が明らかになったのは、神の言が人となられて、ご自分を人に、また人をご自分に似せてくださったときです。それは、御子の似姿によって、人が父にとって尊いものとなるためです。実際、過ぎ去った時代には、人は神のかたちに造られた、と言われてはいました。しかし、それは示されていませんでした。そのかたちに人が造られた言が、まだ目に見えなかったからです。そのため、人は似姿をもたやすく失いました。しかし、神の言は肉体となられました（ヨハネ一・一四）。そのとき、言は二つとも確かにしてくださいました。実際、言は、ご自身が、ご自分のかたちであったものとなられて、まことのかたちを示してくださいました。また、似姿を確かにしてくださり、元どおりにしてくださいました。目に見える言によって、人を目に見えない父に似た者としてくださったのです。5:16:3 主は、前に述べたことによってだけでなく、受難そのものによっても、父とご自身とを明らかにしてくださいました。実際、主は、初めに木において生じた人の不従順をおほどきになりながら、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられました（ピリピ二・八）。木において生じた不従順を、木においてなされた従順によっていやしてくださったのです。わたしたちを形造ってくださったかたに対して、不従順がありました。もし主が別の父を告げ知らせておられたのなら、その不従順を、同じ従順によってほどきに来られることはなかったでしょう。しかし、主は、わたしたちが神に聞き従わず、神の言葉を信じなかった、まさにそれと同じものによって、従順を持ち込んでくださいました。また、神の言葉への同意を持ち込んでくださいました。それによって、主は、神ご自身をはっきりと示してくださったのです。この神を、わたしたちは、最初のアダムにおいて、その戒めを行わずに怒らせました。一方、第二のアダムにおいて、死に至るまで従順な者となって、神と和解したのです。わたしたちが負債を負っていたのは、ほかのだれかに対してではなく、初めにその戒めに背いた、そのかたに対してだったからです。

5:19:1 こうして、すでに夫のもとにいたおとめマリヤは、天使から、真理によってよい知らせを受けました。それは、明らかに、主がご自分のところに来られるという知らせでした。主のものである造られたものが主を担い、しかも、主ご自身がそれを担っておられます。そして、木においてなされた不従順のまとめ直しを、木においてなされる従順によってなさり、あの惑わしをほどいてくださいます。すでに夫に定められていたおとめエバは、その惑わしによって不幸にも惑わされました。一方、マリヤは、幸いにもよい知らせを受けたのです。実際、あのエバは、天使の言葉によって惑わされ、神の言葉に背いて、神から逃れることになりました。それと同じように、このマリヤは、天使の言葉によってよい知らせを受け、神の言葉に従って、神を宿すことになったのです。エバは神に従わなかったのですが、マリヤは、神に従うように説き伏せられました。それは、おとめマリヤが、おとめエバの味方となるためでした。人類は、おとめによって死に縛りつけられたように、おとめによって救われます。おとめの不従順が、おとめの従順によって、等しい秤で釣り合わされたのです。実際、最初に形造られた者の罪も、最初にお生まれになったかたが正してくださって、改められました。へびの賢さは、はとの素直さによって打ち負かされました（マタイ一〇・一六）。わたしたちを死に結びつけていたあの縄目も、ほどかれたのです。

異端反駁（抜粋）

2026年11月23日版
著者　エイレナイオス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/irenaeus-against-heresies/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/irenaeus-against-heresies
全文を、古いラテン語訳の本文（Adversus haereses）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。